

現代若き女性気
質集

岡本かの子



これは現代の若き女性氣質の描写びようしやであり、諷刺ふうしであり、概観がいかんであり、逆説である。長所もあれば短所もある。読む人その心して取捨しゆしやよろしきに従たい給え。

○彼女はじつとして居いられなくなつた。何か試しみ度たがつている。自分を試ためて見み度たがつている。自分の市場価値を。

○「恋など馬鹿ばからしくて出来できなくなりましたわ」と言う。「けれども愛の気持ちだけは失あい度たくありません。」

○彼女に取とつてスピーデイで無いものは魅力みりよくが無い。それで退屈たいくつな時は、せめて街の自動車を眺ながめる。

○「結婚？ そうね。出来るだけ我儘わがままをさして呉くれる男か、それとも絶對的に服従させられる強い男とならばね。」

○チヨコレートを食べられる暇ひまさえある職業だつたら職業というものは何という好もしいものでしょう。

○繕つくろった靴下くつしたでも穿はくときは皺しわの寄らないように。

○「お習字、生花いけばな、お琴こと、おどり——こういうものに却かえつてモダニテイを感じ、習い度いと思うことはあるけれど、さて、いざとなつて見るとね。」

○「何でも断ことわられて顔が赭あかくなるようじや駄目だめよ。」

○女に向つて機嫌きげんを取るような男も嫌いなら、見下けんべいげて権柄けんべいづくな男も嫌い。

○自分で慥こしらえたものくらい気に入るものはない。洋服でも、お友達でも。

○「お金入れの口を開けてみて、お金が一文いちもんも無いときは何だか可笑おかしくつて可笑おかしくつて、あはあは笑うのよ。たとえ困るの

は知れ切つていても、若さのせい、か知らん。」

○「訣わかれの挨拶あいさつのお辞儀じぎをしてしまつてから、また立話をする。あんなことあたし達にはないわ。」

○「おなかが減すいて家へ帰る電車がなかなか来ないときだけ、ちよつとセンチになるわよ。」

○来年あたりのことまで見当がつくけれど其その先は考えても判わからない。考えると頭が痛くなるから止よす。

○ついでに洗う洗濯物が無くて、お湯にどつぷり入るときくらい嬉しいことはない。

○「どうしてこう心配事が出来ない性分しょうぶんだろう。もつとも心配事があると直すぐレコードをかけて直すぐ紛はぐらかしちまう癖くせがあるんだけれど。」

○牡丹ぼたんや桜のように直すぐ散つてしまふ花には同情が持てない。枯か

れてもしかみ付いている貝細工草や百日草のような花に却つて涙がこぼれる。

○ラグビーを見ているときだけ男の魅力を感じずる。

○子供は少し不器量なのが好き。

○「自分ながら利口過ぎるのが鼻につくから、少し馬鹿になる稽古をしようと思うんだけど。」

○お金があると、ついお友達と円タクに乗ってしまつて。

○大概な事は我慢が出来るけれど。鈍感なものだけはトテモ堪らない。

○ジャズの麻痺、映画の麻痺、それで大概の興味は平凡なものに思える。始終習慣的に考えているのは「何か面白いものは無いか知らん。」

○「一生のうち一度だけ、巴里は死ぬほど行って見度いわ。」

○フレッシュの苺クリーム、ブライトな日傘、初夏は楽しい。

○折角ハイキングに行っても、帰って来て是非銀座へ寄らねば何となく物足り無い。

○偉くなるうなぞとはちつとも思わない。空虚な気がする。それより刹那々々の充足感。

○そりや時々はくさることもあるわ。希望の飛行機が経済的事情にぶつかつて、うまく飛行が運ばない時の気分のエアポケット。けれども理由を運動の不足になすり付けてしまつて、せつせとスポーツすれば癒る。

○わたくし達は、外でお友達と一緒にの時は「ノシちやえ」なぞと随分、男のような言葉も使つてわあわあ騒ぐ。けれども家へ帰つて家庭の人となる時は、まるで別人になつておとなしい良家の娘になる。それでいて、どっちにもちつとも矛盾を

感じないのは、われながら不思議だ。

○「一生に一度は真剣しんけんな気持ちにさせられるものにぶつかってみたいと思うことは、そりやあたし達にだって、ちゃんとあるわ。」

○「流行なんてつまんないと思うんだけど、やってみれば悪い気持ちもないものね。」

○「第一、朗ほがらかにしなくっちゃ損そんじやなくて。」

○「いざとなつて決心すりや、裸のモデルにでも平気でなれますわ。そして食べて行きますわ。」

○「あたし達に向つてはつきりした考えを言えと言つたつて、そりや無理ですわ。まだまだいろいろ経験してから考えを決め度たいと思つて居いるんですもの。」

○彼女の笑いは、全く自然に見えるほど洗練せんれんされている。けれ

ども彼女は、腹の底から笑った味を知らない。

底本：「愛よ、愛」メタローク

1999（平成 11）年 5 月 8 日第 1 刷発行

底本の親本：「岡本かの子全集」冬樹社

1976（昭和 51）年発行

※「慥《こしら》えた」の表記について、底本は、原文を尊重したとして
います。

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2004 年 3 月 30 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。